



年 組 名前

道新ワークシート

LED導入 賛否両論

人手不足、強風対策に有用／ろうそく使うべき

今年の小樽雪あかりの路

点滅するLEDを雪に埋めて作った小樽運河の「雪螢」17日



ろうそくの火をともしことを基本とする「小樽雪あかりの路」（10～17日）のメイン会場で、発光ダイオード（LED）によるオブジェ点灯が目立った。ろうそくの点灯は人手がかかり、LEDは強風などの悪天候でも消えない。だが、イベント初期から続くコンセプトを踏まえ、反発する意見も出ている。今回は担い手不足で「あかりの路」会場も縮小傾向で、次回への課題が見えた。

オブジェ破損、ボランティア減少も課題



オブジェが壊されないように手宮線会場に立てられた看板＝15日

実行委によると、LEDは運河会場と手宮線会場が昨年より約3倍の高さから明かりをつり下げた通路「光の回廊」などに使用。今年は雪に埋めて点滅させるオブジェ「雪螢」（運河会場）や、「フクロウのオブジェが並ぶ「フクロウの森」（手宮線会場）でも使われ、使用範囲を広げた。運営を担うボランティアが管理エリアごとに、主催する実行委から使用許可を得ているという。

イベント運営は一般的に、ボランティアがろうそくの熱で解けたオブジェを修復するほか、強風で消えた火をつけ直して支える。開催期間中に1日平均約200人が必要で、市民だけでなく、韓国、台湾からの団体などが担当。運河会場で作業した A さん(70)は今年初めてLEDを使い、「風が強くて火が消えやすい運河でも光を維持し

1日に200人必要

ていた」と振り返る。第26回の今回は約25万人が来場。札幌をはじめ国内外から多くの観光客が押し寄せ、一大イベントに成長した。手宮線会場を担当した B さん(70)は「火が消えてしまっただけで観光客が見られないのはかわいそう」と、観光客の期待を背負っている」と説明する。「消えたらろうそくの再点灯作業は寒くてつらく、簡略化しないと担い手が集まらない」（Aさん）という側面もある。

市民機運低下か

イベント名の由来は小樽の作家で評論家伊藤整（1905～69年）の第1詩集「雪明りの路」。ろうそくメーカーや、浮き玉製造所が市内にあり、アットホームな雰囲気でも観光客をもてなしてきた。会場のあり方などを議論する検討委の1人、C さん(70)は「ろうそくを使うのが原則。人手不足なら会場を縮小すべきだ」と疑問を投げかける。実行委も前回と今回のLED使用は試験的な運用だといひ、「ろうそくを使うコンセプトは守りたい。来年以降に向けて検証する」とする。

期間中には、暖気による気温上昇で雪が解け、何者かに

よるオブジェの破損もあった。14日は雪あかり期間中の最高気温が史上初めて10度を超え、韓国の団体「OKOVO（オコボ）」メンバーの大学2年、D さん(22)は「毎日オブジェを作り直している」と疲れた様子を見せていた。手宮線会場、運河会場、小樽芸術村会場ではオブジェや氷柱が壊された。「オブジェを壊さないで」。英語を併記した看板が手宮線会場には立てられた。

海外からのボランティアに比べて市民ボランティアは減少傾向にある。市内各地の町内会や学校による「あかりの路」会場はコロナ禍前の2020年は37カ所だったが、今年は27カ所だった。実行委は「コロナによる中止などで雪あかりから人が離れたのに加え、高齢化も原因」とする。

作家伊藤整ゆかりの塩谷地区は今年、「あかりの路」の開催をやめた。実行委は「市内全体が会場になるのがイベントのコンセプト。みんな盛り上げようという機運の醸成がないとさみしい」とする。

（矢野伶奈）



年 組 名前

道新で
ワークシート

- ① タイトルに「LED導入 賛否両論」とありますが、あなたは、LED導入に賛成ですか。それとも反対ですか。記事に書いている事実を基に、理由を書きましょう。

賛成・反対	
記事の事実	
理由	

- ② LED導入に賛成の人も反対の人も納得する、あなたの考えを書きましょう。